行仙宿・行者堂の堂守りとして

玉岡憲明

行仙宿小屋は、平成二年六月末に竣工した。いつの間にか二十五年余の歳月が経過している。

本来ならば、奥駈葉衣会の創始者の前田勇一翁が採り上げられるところであったが、前田さんは其の頃は重病にかかられて、見た目にも痛々しく、とても大事業を果されるのは無理であろうと推察したが、さりとて小生がなり代ってこの重大事業をお引受けするのは身に余ることで固くご辞退させて貰ったものであった。

私にはその当時、太古ノ辻から熊野本宮に至る間の道普請を始めたところで、行仙宿敷地造成作業と共に建設資金の募集が重なって、とてもじゃないが前田さんの真似など出来ない状態であった。

山小屋建築を引受けてくれた木下嘉彦棟梁も塩川正十郎先生にお願いした「山林抖擻」の御揮毫も竣工式に間に合うよう、東京迄頂きに参上する用件や行者堂に納めて頂く役行者像の受領やら、目の廻る忙しさに没頭していたのである。

御揮毫をお願いして送って下さいなどとは、そんな我儘は許される筈もなく、とにかく日帰りで東京を往復するプランを立て「いつお伺いしてよろしいか」とお伺いを立てたのであった。

手土産に何が良いかと、伊勢エビとアワビを別便で送り、マイカーで松阪駅へ、それより近鉄特急で名古屋へ、続いて新幹線、東京駅からタクシーを飛ばして先生の事務所へ。頂いてトンボ帰りで、その日の内に帰宅。

翌日は、その扁額持って棟梁に梁に取合せて貰うやら、京都聖護院に出かけて仏像の拝領、全く目の廻る忙しさであった。

愈々、山小屋の落慶法要といい、仏像の開眼法要といい、肝心要の日に限って可成りの雨となり、聖護院から宮城泰年宗務総長をはじめ二十数名の方々の御出仕に依る、雨中での採燈護摩法要と落慶法要が盛大に営まれたのであった。

一方、その雨にもかかわらず、地元の方々をはじめ我が山仲間、後援者の方々で。百名にも余る大勢の御参集者を頂いて、出来たての山小屋は超満員の盛況者で溢れ返ったものであった。

山小屋の建築を委任した木下棟梁は、好況の時代でいくらでも下界での仕事が多かったにもかかわらず、他を振向きもせず一図にこの仕事に打込んで下さり、本当に有難いことであった。

棟梁は、「この仕事を完成するまでは顔のヒゲは一切そらずに、完成の日に鋏を入れて貰う」と我々の意気込みにも勝る真剣さをお持ちであったようで、各代表者の祝辞が終ってから、愈々断髪式となった。

神戸からお出で下さった米沢典之医師の介添えで、各代表の方々が鋏を入れて下さり、黒々と生えていた顔面のヒゲが見違えるばかりによみ返ったものであった。

私は一応代表者として、大勢の参会者から「良い出来映えの行者堂と山小屋が出来たものだ」と祝福して下さったが、喜んでばかりに浸ることは出来なかった。というのは、棟梁に一つの約束をしていたのである。それが竣工の暁には、金壱封(百萬円)を約束していたもので、果してその金壱封の約束は果せるであろうかと、不安にさいなまれていたのである。

男の約束として「金は無いから金壱封は払えない」などとは、口が裂けても言えぬことで、家内とひと悶着でその金作りに頭を悩めたのであった。

ところが有難いことに「天は助くる者を助く」という諺の通り引きも切らずに頂いたご祝儀金は、帰宅してから整理したところ、百万円に上乗せして下さっていたのであった。

後日、改めて祝賀会を開催して、その席上棟梁に贈呈させて貰って、恥をかかずに済ませて頂いた次第であった。

又、行者堂前に建て並べていた幟旗は、大方は神奈川県上野原で布教活動をしておられる田上妙験師の信者の方々からのおすすめのひと言で、東北の仙台市、山形県から西は九州福岡県に至

る広範囲から夫々一枚、一旗ご注文で、色とりどりの幟がすべて直染めされて二十数本にも達して、いやが上にも祭りの尊厳さを加味して下さっていた。 それに加えて下北山村役場から紅白の幔幕を提供して下さって、いやが上にもこの法要を高めて下さっていた。

九州といえば、福岡県柳川市の吉開賢淳師は、三井寺所属の方であるが、柳川流古武道の伝承者でもあり、或る日全国の古武道の有志を集めて三井寺金堂前で壮大な古式に則った古武道の型を奉納されたことがあった。その折小生も頼まれて関東の流派の直心影流の御推挙の信夫息游師、白石雅之氏にお願いしたことがあった。

転法輪岳に二度上がって、吉開師をお待ち申し上げたのであったが、単独の登山者にその様子を伺ったところ、可成り疲れた様子であったことから、かなりの遅れが予測されるということで、一旦平治宿に立ち戻り改めて上って午後八時頃、辺りが暗闇に包まれていた頂上に再び立った。

遠く倶利伽羅の辺りから法螺の音が響いて来た、これは必ずや吉開師の法螺の音と改めてお迎えの心ずもりをしてお待ち申し上げたのであった。

意外とお元気で山頂に現れた、フラッシュをたいて一発写真を撮らせて頂いて意外さに驚かれたが、勇気百倍の様子でコーヒーを召し上がって貰い、暫らく近況を伺って、やおら平治にお入り頂いた。

登山者のいずれもが深い眠りについていて、夕食の用意を整えて召上がって頂き、我々も疲れて眠りについたのであった。

翌朝は、他の登山者を送り出し、やがて吉開師も送り出して後を片付けて、我も平治をあとにした。

その頃は、小生も勤めより解放された身で、頃合いを見計って吉野へ廻り、やがて到着される吉開師を柳の宿でお待ち申し上げ、再び蔵王堂を経て竹林院へと廻わり、夕食をご馳走になって、一室で吉開と眠りを共にしたものであったが、その折に意外にも吉開師より一振りの脇差を賜わって、おどろくやら恐縮の次第であった。

一方、横山義彦師(法名、義照師)は、吉野桜本坊ご縁の方で愛知県安城市住所の行者さんであられる。

吉野～熊野本宮間の百日行を二度も修行された並々ならぬ方である。ひと言で百日行と言われることは易しいが、一気に十往復を駈けることは容易な行ではない。

私は行者堂の開眼供養以来、つとめて堂守りとしてお堂に泊り込み、終始ローソクの灯りを絶やさぬようお堂で勤行をさせて貰って来た。又、賽銭は、五百円硬貨を賽銭箱に入れて、持経宿とも併せると馬鹿にはならぬ金額となったものである。

かの笠捨山の山頂に和歌山雷観師と言われる行者さんが「己れが信ずる石碑」を奉納されたことがあったが、その和歌山さんは、この行者堂をお詣りする毎に、行者堂の背後から後光が指すと言われた事があった。おそらく浅村朋伸師という仏像彫刻の方が、役ノ行者像を克明に手入れをされて、その胎内より貴重な文書が発見されたことと、なにかつながりがあるのではなかろうか。 その文書は、聖護院の古文書資料室に貴重な扱いで保存されることと、我らの山彦の行者堂とのつながりも重なって来るに違いない。

行仙宿と行者堂がある限り山彦ぐるーぷと聖護院のつながりも延々と続くことであろう。

終りに、今回の法要は、御協力下さった女性方、並々ならぬお手数とご馳走の数々で一層法要が盛り上がったこと、川島代表と共に厚く御礼申し上げます。